女子青年の独立意識と親子間の心理的距離との関連[1]

The Relationship between Female Adolescents' Self-reliance and Their Recognized Psychological Distances between Their Parents

小　澤　　真
Makoto Ozawa

ABSTRACT

The relationship between female adolescents' self-reliance and the recognized psychological distances between their parents was exploratory studied. In STUDY 1, the four factors of adolescent-parent relationship were found out by factor analysis; "communication", "controlled", "intimate", "emotional connection". In STUDY 2, the recognized psychological distances between their parents and the existencies of their parents were measured by drawing technique, and were considered the relation with the self-reliance. Several characteristic processes of psychological maturing in Japanese female adolescence were suggested.

Key Words: self-reliance, adolescence, family relationship, psychological distance

一般に青年期後期は自我同一性を確立する時期にあたり、家庭外においても独立しうる自己としての位置を確立するための時期であり、同時に家庭内における自己の位置も、保護の対象としての子供から独立した成人としての位置づけへと確立される時期である。そうした意味においてこの時期は心理的離乳の時期とも呼ばれる。例えば落合（1995）は心理的離乳への5段階過程仮説として、(1)親が子供を手の届く範囲において、子供を抱え込み養っていく親子関係、(2)親が子供を目の届く範囲において、親が子供を危険から守ろうとする親子関係、(3)目の届かないところに行ってしまう子供の成長を、親が遠くで念じている親子関係、(4)親子が手を切り、親子間の距離を大きく取る親子関係、(5)子は子でありながら親になり、親は親でありながら子になる親子関係（心理的に離乳した状態）の5段階を提唱している。

かねてから親からの心理的な分離—独立の問題は親への依存欲求との葛藤と結び付けて考えられてきた（eg. Minuchin, 1974; Steinberg, et al., 1978; Steinberg, 1981; etc.）が、近年では青年の独立に対して家族がサポーティブであれば必ずしも独立と葛藤は伴わないといわれるようになった（Bell, et al.,1982; Pipp, et al.,1985; Papini, 1986; etc.）。一方でこの分離－独立の過程に性差が存在することも指摘されており（加藤ら、1985; 長尾，1992; 小野寺，1993; 山本，1993; etc.）、特に日本の女子においてはこの過程に独特な様相があることが示唆されている。

1　本研究は筆者が指導した今泉良子、植木礼子両氏による平成7年度大分県立芸術文化短期大学コミュニケーション学科卒業研究に用いられたデータについて筆者が新たに分析し、考察を加えたものである。

そこで本研究では、青年期後期にある女子を被験者として、彼女らの親子関係の認知について両親との心理的距離と存在感に焦点を当て、独立意識との関連を探索的に探ることを目的とした。

研究１：「親子関係に関する質問紙」の作成

目　　的

ここではまず、被験者の親子関係の構造を探るために「親子関係に関する質問紙」を作成することを目的とした。

方　　法

1．被験者

公立短期大学生、女子100名

2．手続き

一般的な親子関係を表すものと想定される60個の短文を作成し、これに対して父親、母親についてそれぞれの5件法で回答を求めた。調査は無記名としたが、研究２におけるデータと符合させるためにペンネームの記入を求めた。調査票は1995年11月に個別に配布され、77名から回答を得た(回収率77％)。

結果と考察

得られた回答のうち回答に偏りがあった21項目を除く、39項目について、「はい」に5点、以下「どちらかといえばはい」に4点、「どちらでもない」に3点、「どちらかといえばいいえ」に2点、「いいえ」に1点を与えて得点化し、父親についての回答と母親についての回答をまとめた全体について因子分析（主因子法・直交バリマックス回転）を行ったところ、固有値の変動などから、４因子が抽出された（Table １）。

まず第Ⅰ因子についてみると、(33)あなたと仲がよい(0.788)、(9)たくさん会話をするほうだ(0.786)、(4)家庭の中でよくしゃべる(0.723)、(43)父・母がいると場が和む(0.696)、(29)父・母に何でも話せる(0.670)等の項目が高い負荷量を示しており、これらの項目は親との間の意志疎通について、量的、質的な側面から表しているものと考えられ、第Ⅰ因子は「コミュニケーション」の因子と命名された。

第Ⅱ因子では、(27)自分をよく怒る(0.840)、(17)口やかましい(0.779)、(11)あなたに対して厳しい(0.723)、(7)自分とよく喧嘩をする(0.634)、(18)自分のことを干渉する(0.606)等の項目が高い負荷量を示しており、これらの項目は親の干渉的、支配的な態度についての青年の側からの認知を表しているものと考えられ、第Ⅱ因子は「被支配性」の因子と命名された。

第Ⅲ因子には、(54)父・母は海のような存在だ(0.675)、(52)父・母は太陽のような存在だ(0.567)、(56)嬉しいことを一番に伝えたい(0.545)、(51)できれば一生一緒に暮らしたい(0.513)、(25)尊敬している(0.480)といった項目が高い負荷量を示しており、親に対する尊敬の念を含めた親和的な態度を表しているものと考えられ、「親和性」の因子と命名された。

さらに、第Ⅳ因子では、(35)父・母がいなくても平気だ(-0.686)、(14)顔を見ると安心する(0.524)に代表される、両親との情緒的な関わりを表す項目が比較的高い負荷量を示しており、「情緒的結合」の因子と命名された。

Table 1 各項目の因子付加量

項目	コミュニケーション	被支配	親和	情緒的結合	共通性
(20)良き相談相手だ	0.802	-0.029	0.228	-0.008	0.696
(33)あなたと仲がよい	0.788	0.067	0.147	0.146	0.669
(9)たくさん会話をするほうだ	0.786	0.137	-0.044	0.322	0.742
(46)気が合う	0.762	-0.086	0.224	0.074	0.644
(40)一緒に旅行したい	0.759	-0.145	0.257	-0.008	0.664
(21)家にいないと寂しい	0.737	-0.107	0.276	0.369	0.767
(4)家庭の中でよくしゃべる	0.723	0.227	-0.057	0.288	0.660
(43)父が・母がいると場が和む	0.696	0.044	0.274	0.212	0.606
(29)父・母に何でも話せる	0.670	-0.083	0.310	0.159	0.577
(2)一緒に出かける	0.646	0.012	0.026	0.053	0.421
(10)学校の話をする	0.630	0.048	0.112	0.249	0.474
(15)心の支えだ	0.626	-0.129	0.311	0.367	0.640
(28)自分の事をわかってくれる	0.609	-0.198	0.429	0.183	0.628
(25)尊敬している	0.605	-0.097	0.480	-0.016	0.606
(26)頼りにしている	0.573	-0.035	0.302	0.178	0.452
(52)父・母は太陽のような存在だ	0.556	-0.129	0.567	0.136	0.665
(16)父・母の子でよかったと思う	0.548	-0.163	0.440	0.263	0.589
(14)顔を見ると安心する	0.547	-0.189	0.279	0.524	0.687
(49)父・母に好きな人の話をしたことがある	0.547	-0.139	0.019	-0.043	0.321
(1)口数が少ない	-0.498	-0.298	0.183	-0.380	0.515
(22)休日は一緒に過ごす	0.498	0.127	0.053	0.346	0.387
(24)優しい	0.427	-0.298	0.122	0.323	0.390
(27)自分をよく怒る	-0.005	0.840	0.032	-0.121	0.721
(17)口やかましい	-0.076	0.779	-0.056	0.000	0.616
(11)あなたに対して厳しい	-0.069	0.723	0.166	-0.150	0.577
(7)自分とよく喧嘩をする	0.048	0.634	0.001	0.105	0.415
(18)自分のことを干渉する	-0.014	0.606	-0.284	0.112	0.461
(19)うっとうしいと思うことがある	-0.426	0.537	-0.422	-0.062	0.651
(38)心配性だ	0.037	0.397	-0.144	-0.006	0.180
(39)いばっている	-0.321	0.358	-0.109	-0.100	0.253
(42)勝ち気だ	0.091	0.322	-0.089	-0.147	0.141
(54)父・母は海のような存在だ	0.328	-0.108	0.675	0.004	0.574
(56)嬉しいことを一番に伝えたい	0.539	0.018	0.545	0.154	0.612
(51)できれば一生一緒に暮らしたい	0.451	-0.182	0.513	0.227	0.551
(30)嘘をつけない	0.180	-0.150	0.422	0.182	0.266
(59)あなたは父・母の背中を見て育ったと思う	0.339	0.057	0.394	-0.026	0.275
(34)座る席が決められている	0.142	0.055	-0.292	0.020	0.108
(55)あなたが外出しているとき部屋に入られると嫌だ	-0.121	0.051	-0.290	-0.267	0.173
(35)父・母がいなくても平気だ	-0.332	0.195	-0.122	-0.686	0.633
因子負荷量の2乗和	10.397	3.880	3.565	2.165	20.007
因子の寄与率(%)	26.658	9.947	9.141	5.552	51.299

研究２：親子関係における主観的な心理的距離および存在感の測定

目　　的

被験者が認知する親子関係の様相を両親との心理的距離および両親の存在感を直感的に図示させる方法を用いて測定し、独立意識ならびに研究1の結果得られた4因子との関連を探索的に検討することにより青年期後期における女子の心理的離乳の様相を探ることを目的とした。

方　　法

1．被験者

研究１における対象者のうち無作為に抽出した80名を被験者とした。

2．手続き

1995年12月に、以下の３つの測定具をセットとした調査票を一斉に配布し、後日個別に回収した。調査は無記名としたが研究１で得られたデータとの符合を行うために前回と同じペンネームの記入を求めた。41名から回答が得られ、回収率は51.3% であった。

(1)独立意識尺度

加藤ら(1980)が作成した「独立性」(10項目)、「依存性」(5項目)、「反抗・内的混乱」(5項目)の３つの下位尺度、計20項目からなる独立意識尺度について、「全く自分にあてはまる」から「全く自分にあてはまらない」までの５件法で回答を求め、それぞれの回答に対して５点から１点までの得点を与えた。

(2)親子関係における主観的な心理的距離および存在感の測定

Fig.1に示すように、２つの×印を7.1㎝間隔で配置し、１つを被験者、もう1つをその母親を示すものとし、被験者を示す×印を中心として直径2.2㎝の円が描かれた用紙を被験者に配布した。

被験者には２つの×印間の距離は被験者から見た両者間の心理的距離を表すこと、および円の大きさは被験者から見た存在感の大きさを表すことを説明した上で、まず父親の位置を、被験者と母親との距離を基準として、被験者との心理的距離および母親との心理的距離を考慮して記入するように求め、さらに被験者の円の大きさを基準として父親および母親の存在感の大きさを表す円をそれぞれの×印を中心として描くように求めた。

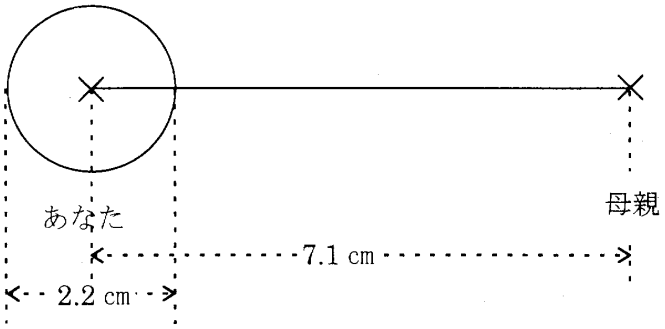

Fig. 1　親子間の心理的距離および存在感の測定

(3)居住地

被験者が現在親と同居しているか、あるいは親元から離れ自宅外で一人暮らしをしているかが、親子間の心理的距離および存在感の認知、青年の独立意識に影響を及ぼしているのではないかと考えられたので、現在親と同居しているか、一人暮らしをしているかについて回答を求めた。

3．結果の処理

(1)独立意識尺度

「独立性」、「依存性」、「反抗・内的混乱」の3つの下位尺度について素点を合計し、それぞれの下位尺度得点とした。

(2)親子関係における主観的な心理的距離および存在感の測定

図に示された、「被験者－父親間の距離」、父親と母親との距離、父親および母親の存在感を表す円の直径について計測した。フリーハンドで描かれているため、円の直径については中心点(×印)を通り直径が最大になる点で計測した。

結果と考察

1．独立意識尺度

41名の被験者について独立意識尺度の下位尺度ごとの平均得点を算出したところ、「独立性」は35.37点(SD=4.86)、「依存性」は17.90点(SD=3.21)、「反抗・内的混乱」は11.56点(SD=3.02)であった。被験者のうち、30名が自宅通学生であり、自宅外から通学している者は11名であった。そこで、自宅生と自宅外生との間で各下位尺度の平均得点を比較したところ、「独立性」では自宅生が34.50点(SD=3.83)、自宅外生が37.73点(SD=6.37)、「依存性」では自宅生が17.50点(SD=2.92)、自宅外生が19.00点(SD=3.67)、「反抗・内的混乱」では自宅生が12.23点(SD=2.80)、自宅外生が9.73点(SD=2.83)であり、自宅外生が自宅性に比べて「独立性」は高く、「依存性」では低い得点ではあったが、この差は統計的に有意なものではなかった。したがって現在親と同居しているか否かという物理的な条件の差は必ずしも独立性や依存性に影響を与えるものではないようである。このことは、落合(1995)の「心理的離乳とは、単に経済的に自活することではもちろんないし、手を切る親子のように精神的・物理的に距離のある離れた状態になることでもない」という見解とも一致する。

一方で、「反抗・内的混乱」において自宅生が自宅外生より有意に高い得点を示した($t(39)=2.47$, $p<.05$)が、これは自宅生の方が自宅外生に比べて頻繁に親と接触するために、意見対立や感情的な衝突を経験する機会が多いためであろう。

2．親子関係における心理的距離

親子関係における心理的距離については39名から有効な回答を得た。図示された被験者と父親との間の心理的距離の平均は8.53cm(SD=3.83)であり、被験者—母親間(7.1cmに固定)と比べて有意に長く($t(38)=2.30$、$p<.05$)、父親—母親間の5.87cm(SD=4.06)と比べても有意に長かった($t(38)=5.97$、$p<.01$)。すなわち、被験者は母親に比べて父親を相対的に離れた存在として認知していることがわかる。天貝(1996)は中高校生を対象として本研究と同様な心理的距離の測定法を用い、友人および家族に対する心理的距離は親密性と有意な正の相関があることを示しており、この距離関係を親密さの度合いとして読みとることも可能である。一般的な議論として、このように父親との間に距離をおこうとする傾向は青年期後期の女子に特有な傾向とも受け取れるが、小野寺(1993)の日米の青年を対象とした比較研究では、父親との情緒的結びつきの強さはアメリカ女子、アメリカ男子、日本女子、日本男子の順であり、日本男子は日本女子を含む他の3群に比べて著しく父親との情緒的結びつきが弱いという結果を得ている。

また、本研究において父親－母親間の距離が有意ではないものの被験者－母親間の距離よりも短く認知されており、３者関係においてはもっとも短い値となった。このことから、被験者が世代間の境界を意識しているらしいことが示唆された。

両親の存在感については37名から有効な回答が得られ、父親を表す円の直径の平均は4.370cm（SD=3.447）、母親では4.3111cm（SD=2.341）であり、被験者の父親と母親の存在感の認知に差はなく、自分よりも父親および母親の存在感を有意に大きく見積もっている様子がうかがえた（順に、t (36)=3.338，p〈.01; t (36)=5.411，p〈.01)。

３．独立意識尺度と両親との心理的距離および存在感との相関

被験者―父親間および父親―母親間の心理的距離、父親および母親の存在感の各変数間の相関係数および独立意識尺度の各下位尺度との間の相関係数を算出した（Table 2)。まず両親との心理的距離および存在感についてみると、被験者―父親間の心理的距離と父親―母親間の心理的距離との間、および父親の存在感と母親の存在感との間にそれぞれ強い正の相関が見出された（r=.76，t (37)＝7.13，p〈.01; r=.68，t (35)=5.53，p〈.01)。すなわち、被験者―父親間の心理的距離を遠く認知している者は父親―母親間の心理的距離も遠くに認知しているということであり、被験者と母親との間の距離を固定していることを考慮すると、父親を相対的に母子から離れた位置に認知しており、言い換えれば母子密着的な様相を示しているともいえる。また父親の存在感を大きく認知したものは母親の存在感も大きく認知しており、このことは父親と情緒的結びつきの強い青年は、母親とも情緒的結びつきが強く、父親、母親への愛着も強いという小野寺（1993）の知見とも一致している。

Table 2 心理的距離、存在感、および独立意識尺度との相関係数

		距離		存在		独立意識		
		被験者－父親	父親－母親	父親	母親	独立性	依存性	反抗・内的混乱
距離	被験者－父親	1.00	0.76 **	−0.05	0.12	−0.04	−0.56 **	0.17
	父親－母親		1.00	−0.12	0.14	−0.01	−0.50 **	0.08
存在	父親			1.00	0.68 **	0.48 **	0.39 *	−0.19
	母親				1.00	0.33 *	0.20	−0.02

*…p<.05, **…p<.01

一方で、被験者―父親間および父親―母親間の心理的距離と父親および母親の存在感との間に有意な相関は見られず、被験者は心理的距離と存在感の概念をそれぞれ独立したものとして評定していることが示唆された。

次に、これらの変数と独立意識尺度の３つの下位尺度との間の相関についてみると、被験者―父親間および父親―母親間の心理的距離と「依存性」との間に負の相関が認められ（順に、r=-.56，t (37)=4.12，p〈.01; r=.-50，t (37)=3.50，p〈.01)、父親および母親の存在感と「独立性」の間に正の相関（順に、r=.48，t (35)=3.72，p〈.01; r=.33，t (35)=2.06，p〈.05)、さらに父親の存在感と依存性との間に負の相関（ r=.39，t (35)=2.50，p〈.05）が認められた。佐藤ら（1991）は、高校生の悩みに対して求める援助の性質についての研究において、先生や、母親、友人、先輩からの援助、助言では、日常のことなど比較的素直に聞き入れやすいが、父親や他の兄弟には、本当に大事な時を除いてはたやすく関与や干渉されることは望まないことを見出しているが、本研究においても、依存性の高い者は父親を遠くに認知する、つまり相対的に見て母親をより自分に近く認知し父親を母子の対から離れた位置に認知する一方で、父親

の存在感を大きく認知していることから、親を依存の対象として見るとき、父親と母親の役割を区別していることが示唆される。

また独立性の高いものが父親および母親の存在感をより大きく認知していることから、これを精神的な成熟の度合いとしてみれば、心理的離乳に成功した者は親に対する認知を再統合し、新たな親像を確立した結果、これまでより大きな存在として親を認知しているのではないかと考えられる。

4. 「独立性」得点の高低による両親との心理的距離および存在感

そこで、上記の傾向をより詳細に検討するために、被験者を独立意識尺度の各下位尺度の得点をもとに高低2群に分け、両親との心理的距離および存在感について分析を行った。

まず独立意識尺度と心理的距離および存在感の測定の双方に有効な回答が得られた39名について、その「独立性」得点の平均(35.366点)を中心に、36点以上を「独立性高群」(20名)、35点以下を「独立性低群」(19名)とし、群ごとに被験者－父親間の距離、父親―母親間の距離、父親および母親の存在感の平均値を算出した。まず被験者－父親間の距離についてみると、「高群」が8.04cm (SD=2.38) であったのに対し、「低群」では9.06cm (SD=4.86) であり、被験者―母親間の距離7.1cmと比較して統計的に有意な差は見出せなかった。また父親－母親間の距離では、「高群」が5.26cm (SD=2.91) であったのに対し、「低群」では6.61cm (SD=8.21) であり、「高群」において、被験者―母親間の距離よりも5％水準で有意に近く認知していることがわかった($t(19)=2.76$)。すなわち独立性の高い者の方が父親と母親の結びつきをより緊密に意識しており、世代間の境界を意識していることが示唆された。父親の存在感は「高群」が4.97cm (SD=4.11)、「低群」では3.80cm (SD=4.54) 母親の存在感は「高群」が4.40cm (SD=2.48)。「低群」では4.23cm (SD=4.73) であり、いずれも有意に被験者自身の存在感より両親の存在感を大きく認知していた(順に、$t(17)=1.72$, $p<.05$; $t(18)=2.67$, $p<.05$; $t(17)=3.66$, $p<.01$; $t(18)=3.92$, $p<.01$)。また、被験者－父親間の距離、父親と母親との距離、父親および

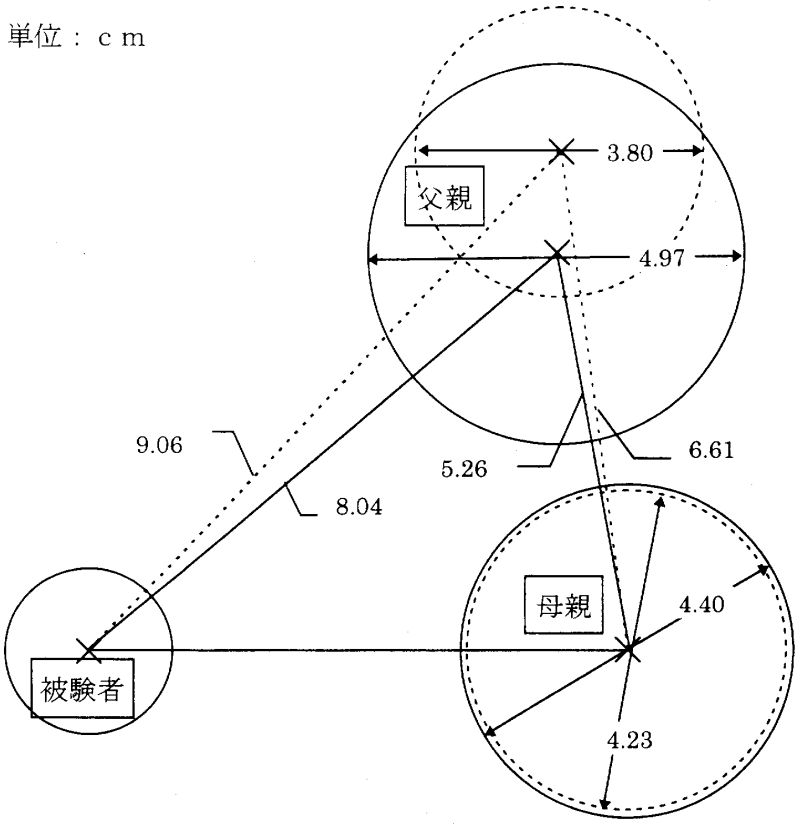

Fig. 2 「独立性」の高低による親子関係の認知
実線は高群、破線は低群を示す。「被験者」の存在感の直径は2.2cm、「被験者」と「母親」との間の心理的距離は7.1cmにそれぞれ固定。

母親の存在感の4変数について両群間の平均値の比較を行ったが、いずれにおいても有意な差は認められなかった。Fig.2はその様子を図に示したものである。

5．「依存性」得点の高低による両親との心理的距離および存在感

「独立性」得点と同様に「依存性」得点の平均（17.90点）を中心に、18点以上を「依存性高群」(22名)、17点以下を「依存性低群」(17名）とし、被験者－父親間の距離、父親—母親間の距離、父親および母親の存在感の4変数について平均値を算出した。「被験者－父親間の距離」は、「高群」が7.44cm（SD=2.26)、「低群」では9.94cm（SD=4.85）であり、「父－母間の距離」では、「高群」が4.52cm（SD=2.30)、「低群」では7.63cm（SD=5.05）であり、被験者—母親間と比較すると、「高群」において父—母間の距離が1%水準で有意に近く（t (21)=5.15)、また「低群」において被験者—父親間が5%水準で有意に遠かった（t (16)=2.34)。「高群」においては被験者—父親間の距離は、被験者母親間の距離とほぼ一致していることから、被験者は親同士をより密接な関係と認識しており、それぞれに期待する役割に違いがある可能性はあるものの、両親を依存の対象としている可能性が示唆される。一方、「低群」においては父親—母親間の距離が被験者—母親間の距離とほぼ一致しており、「高群」に比べて3者間がそれぞれ距離を置いた配置になっている。群間の比較では、「父－母間の距離」において「低群」が「高群」に比べて5％水準で有意に遠かった(t (21.04)=2.291)。

一方存在感についてみると、父親の存在感は「高群」が5.245cm（SD=3.968)、「低群」では3.087cm (SD=1.857)、母親の存在感は「高群」が4.709cm（SD=2.281)、「低群」では3.727cm（SD=2.305）であり、固定された被験者の存在感と比較すると、「高群」においては父親（t (21)=3.52, p〈.01)、母親（t (21)=5.04, p〈.01）ともに有意に大きく認知され、また低群では母親が有意に大きく認知された(t (14)=2.48, p〈.o5)。群間の比較では「父親の存在感」では「高群」が「低群」に比べて5％水準で有意に大きかった(t (31.90)=2.163) (Fig.3)。

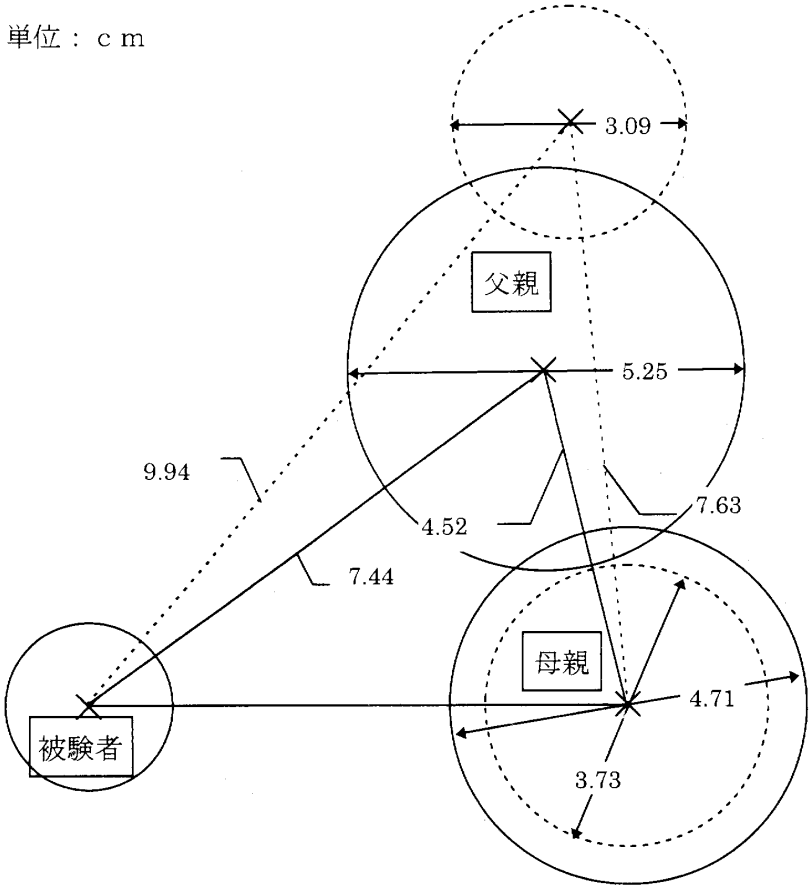

Fig. 3　「依存性」の高低による親子関係の認知

実線は高群、破線は低群を示す。「被験者」の存在感の直径は2.2cm、「被験者」と「母親」との間の心理的距離は7.1cmにそれぞれ固定。

すなわち、依存性の低い者は高い者に比べて父親の存在を小さく認知していたことになる。

6.「反抗・内的混乱」得点の高低による両親との心理的距離および存在感

さらに、「反抗・内的混乱」得点の平均(9.57点)を中心に、10点以上を「反抗・内的混乱高群」(17名)、9点以下を「反抗・内的混乱低群」(22名)とし、4変数について平均値を算出した。被験者－父親間の距離は、「高群」が9.15cm(SD=5.05)、「低群」では8.05cm(SD=2.40)また父－母間の距離では、「高群」が6.65cm (SD=4.56)、「低群」では5.27cm (SD=3.51) であり、固定された被験者—母親間の距離と比較すると、低群において父親—母親間が有意に近かった(t (21)=2.39, p〈.05) 以外有意な差は見出されなかった。父親の存在感は「高群」が4.23cm(SD=3.84)、「低群」では4.490cm (SD=3.07)。母親の存在感は「高群」が4.44cm(SD=2.74)、「低群」では4.20cm(SD=1.94)であり、固定された被験者の存在の大きさと比較して、「高群」における母親、「低群」における父親と母親がいずれも有意に大きく認知されていた (順に、t (16)=3.28, p〈.01; t (19)=3.26, p〈.01; t (19)=4.51, p〈.01)。また、被験者－父親間の距離、父親と母親との距離、父親および母親の存在感の4変数について両群間の平均値の比較を行ったが、いずれにおいても有意な差は認められなかった(Fig.4)。

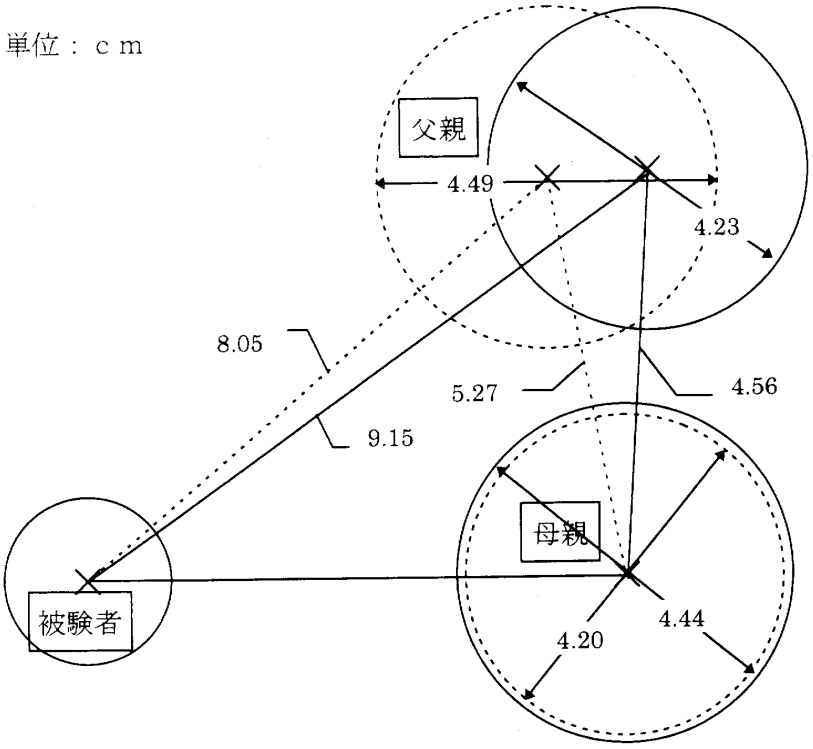

Fig. 4 「反抗・内的混乱」の高低による親子関係の認知
実線は高群、破線は低群を示す。「被験者」の存在感の直径は2.2cm、「被験者」と「母親」との間の心理的距離は7.1cmにそれぞれ固定。

7. 居住場所の違いによる両親との心理的距離および存在感

被験者を自宅通学生と自宅外から通学している者とに分け、被験者－父親間の距離、父親と母親との距離、父親および母親の存在感の4変数について平均値を算出したところ、被験者－父親間の距離は、「自宅生」が8.40cm (SD=4.11)、「自宅外生」では8.84cm (SD=2.96) また父－母間の距離では、「自宅生」が5.58cm (SD=4.42)、「自宅外生」では6.63cm (SD=2.80) であり、固定された被験者—母親間の距離と比較すると、両群とも有意な差は見出されなかった。父親の存在感は「自宅生」が4.00cm (SD=2.40)、「自宅外生」では5.25cm (SD=5.03)、母親の存在感は「自宅生」が4.35cm (SD=2.36)、「自宅外生」では4.23cm (SD=2.30) であり、固定された被験者の存在の大きさと比較して、「自宅生」における父親と母親、「自宅外生」における父

親がいずれも有意に大きく認知されていた（順に、t (25) =3.34, p 〈.01; t (25) =4.30, p 〈.01;t (10) =2.79, p 〈.05)。また、被験者－父親間の距離、父親と母親との距離、父親および母親の存在感の4変数について両群間の平均値の比較を行ったが、いずれにおいても有意な差は認められなかった(Fig.5)。

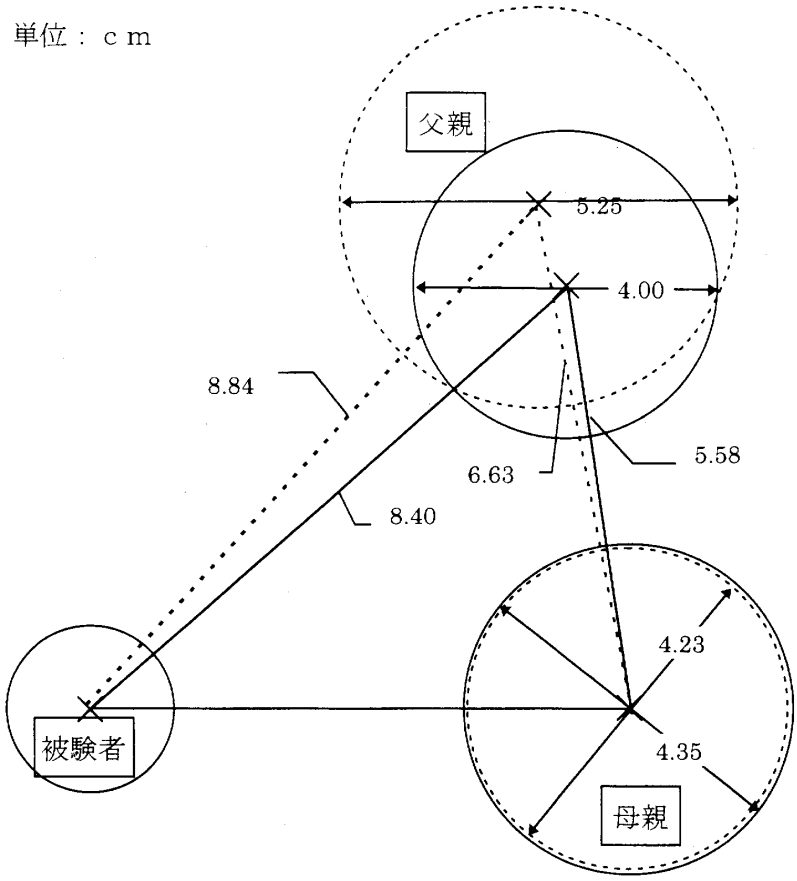

Fig. 5　居住場所の違いによる親子関係の認知

実線は自宅通学者、破線は自宅外通学者を示す。「被験者」の存在感の直径は 2.2cm、「被験者」と「母親」との間の心理的距離は 7.1cm にそれぞれ固定。

8. 独立意識尺度の各下位尺度の高低による４因子の因子得点の平均値

「親子関係に関する質問紙」についての因子分析により得られた４因子について因子得点を算出した。これらについて独立意識尺度の各下位尺度の高低による平均値の比較を試みたところ Table3に示すような結果を得た。

まず父親についてみると、「コミュニケーション」の因子において、「独立性」の高群－低群間（t (36) =2.39, p 〈.05)、および「依存性」の高群－低群間（t (36) =3.234, p 〈.01）に有意な差があり、いずれも高群が低群に比べ高い値を示したが、他の因子ではいずれの下位尺度においても高群と低群の間に有意な差は認められなかった。

母親についての回答では、「コミュニケーション」の因子において、「独立性」（t (37) =2.56, p 〈.05)、「依存性」(t (36) =3.23, p 〈.01)、「反抗・内的混乱」(t (23.45) =3.26, p 〈.01)

Tabale 3 独立意識尺度の各下位尺度の高低による各因子の因子得点の平均値

( )内はSD

	独立性			依存性			反抗・内的混乱		
	高群	低群		高群	低群		高群	低群	
父親　n=	20	18		21	15		15	21	
コミュニケーション	0.16 (0.86)	−0.60 (1.05)	*	0.30 (0.88)	−0.82 (0.87)	**	−0.58 (0.92)	0.12 (1.01)	
被支配	−0.35 (0.87)	−0.49 (1.10)		−0.24 (0.86)	−0.65 (1.16)		−0.18 (1.14)	−0.54 (0.88)	
親和	−0.04 (0.96)	0.45 (0.66)		0.24 (0.82)	0.37 (0.68)		0.37 (0.90)	0.15 (0.74)	
情緒的結合	−0.16 (0.60)	0.40 (0.98)		0.23 (0.86)	−0.15 (0.79)		0.01 (0.92)	0.21 (0.81)	
母親　n=	20	19		21	16		16	21	
コミュニケーション	0.76 (0.64)	0.11 (0.87)	*	0.79 (0.52)	−0.10 (0.90)	**	−0.05 (0.91)	0.78 (0.57)	**
被支配	0.26 (0.81)	0.12 (0.91)		0.12 (0.75)	0.27 (1.04)		0.63 (0.72)	−0.16 (0.85)	**
親和	0.06 (0.60)	−0.04 (0.61)		0.08 (0.48)	0.05 (0.69)		−0.03 (0.64)	0.05 (0.53)	
情緒的結合	−0.27 (0.49)	−0.17 (0.80)		−0.10 (0.77)	−0.38 (0.48)		−0.35 (0.61)	−0.12 (0.71)	

*…p<.05, **…p<.01

の各下位尺度において高群－低群間に有意な差が認められ、「独立性」と「依存性」においては高群が低群に比べ高い値を示し、「反抗・内的混乱」においては低群が高群に比べ高い値を示した。また「反抗・内的混乱」においては母親における「被支配」の因子において高群が低群に比べ1%水準で高い値を示した（t (37)=2.936, p〈.01)。

Tabale 4 居住場所よる各因子の因子得点の平均値

( )内はSD

		自宅通学	自宅外通学
父親	n=	27	11
コミュニケーション		-0.048 (1.117)	-0.266 (1.028) *
被支配		-0.884 (0.883)	-0.229 (1.000)
親和		-0.001 (1.027)	0.271 (0.820)
情緒的結合		0.119 (1.017)	0.100 (0.813)
母親	n=	28	11
コミュニケーション		0.984 (0.373)	0.232 (0.879) **
被支配		-0.046 (0.867)	0.288 (0.879)
親和		-0.013 (0.567)	0.024 (0.639)
情緒的結合		-0.173 (0.854)	-0.238 (0.597)

*…p<.05, **…p<.01

「コミュニケーション」の因子が正方向にコミュニケーションが頻繁かつ円滑に向かう内容を含んでいるところから、青年期後期の女子においては独立的な者および依存的な者において両親とのコミュニケーションが頻繁かつ円滑にはかられていることを示唆する結果である。堀ら（1982）は「兄弟仲よい」「家族団らんに加わる」「自分の部屋に一人でいることが多い」者は成熟方向に多く、一方「近所の家に遊びに行く」「友人が家に遊びに来る」者は未成熟の方向を示しており、親とのコミュニケーションが頻繁かつ円滑にはかられていることは成熟さを物語るものとみてよいであろう。ここにおいて、独立的な者だけではなく依存的な者においても「コミュニケーション」因子の因子得点が高かったことは、一見矛盾した結果である。山本（1993）は「両親からの分離欲求」「対人交流の拒否」「自惚れ」は男子の方が女子よりも有意に得点が高く、「共生欲求」「友人関係の確立」「一人でいられなさ」では女子の方が男子よりも有意に得点が高かったことを日本女子の分離－個体化過程の特性の一つとしてあげており、男子と女子における分離－個体化過程の様相事態が、本質的に異なっていることを示唆している。また、加藤ら（1980）は女子青年の親への依存性が心理的安定と関連していることを示唆している。本研究においても「反抗・内的混乱」の低い者が高い者に比べて母親との「コミュニケーション」因子の因子得点が高く、「反抗・内的混乱」の高い者が低い者に比べて母親からの「被支配」因子の因子得点が高かったことから、特に女子青年の側から見て被支配的に感じないような母親とのコミュニケーションが女子青年の心理的安定に寄与しているらしいことが示唆される。

すなわち、日本女子においては、依存―独立の葛藤というよりは、独立性と依存性が共存しながら母親との良好なコミュニケーションによって心理的安定を図る独特の過程が存在する可能性も考えられる。

結　　語

本研究は青年期後期にある女子を被験者として、彼女らの親子関係の認知について両親との心理的距離と存在感に焦点を当て、独立意識との関連を探索的に検討することを目的とした。

研究１では「親子関係に関する質問紙」を作成し、親子関係についての４つの因子、すなわち「コミュニケーション」「被支配」「親和性」「情緒的結合」を見出した。

研究２では被験者が認知する両親との心理的距離および存在感を直感的に図示させる方法を用いて測定し、独立意識尺度の各下位尺度の高低および居住場所の違いによる比較を行い検討を加えたところ、被験者は独立意識の如何に関わらず親の存在感を自分より大きく認知してい

たこと、「独立性」が高い場合、「依存性」が高い場合ともに父親—母親間の心理的距離を相対的に近く認知し、世代間の境界を意識しているらしいこと、「独立性」が高い場合、「依存性」が高い場合ともに母親との「コミュニケーション」因子の因子得点が高いことならびに「反抗・内的混乱」が高い場合母親からの「被支配」因子の因子得点が高いことなどから特に女子青年の側から見て被支配的に感じないような母親とのコミュニケーションが女子青年の心理的安定に寄与しているらしく、依存—独立の葛藤というよりは、独立性と依存性が共存しながら母親との良好なコミュニケーションによって心理的安定を図る独特の過程が存在するかも知れないこと、などが示唆された。しかし、本研究においてはデータ数が少なく、結論を得るまでにはいたっていない。今後データ数を増やし、さらに詳細な検討を加えることと、縦断的な研究を行い、さらにその様相について検討を加えることが必要である。

引用文献

天貝由美子　1996　中・高校生における心理的距離と信頼感. カウンセリング研究, 29(2), 130-134.

Bell, L. G. & Bell, D. C.　1982　Family climate and the role of the female adolescent: Determinants of adolescent functioning. Family relations. Journal of Applied Family & Child Studies, 31, 4, 519-527.

堀洋道・吉田富二雄　1982　現代青年における心理的特徴と生活行動の関連について. 筑波大学心理学研究, 4, 49-60.

加藤隆勝・高木秀明　1980　青年期における独立意識の発達と自己概念との関係. 教育心理学研究, 28(4), 72-76.

ミニューチン, S.　1983　山根常男（訳）家族と家族療法. 誠信書房. 東京.

長尾　博　1992　青年期の自我発達上の危機状態尺度の併存的妥当性の検討と危機状態の縦断的研究 カウンセリング研究, 25(2), 107-111.

落合　良行　1995　心理的離乳への5段階過程仮説. 筑波大学心理学研究, 17, 51-59.

小野寺敦子　1993　日米青年の親子関係と独立意識に関する比較研究. 心理学研究, 64(2), 147－152.

Papini. D. R., & Sebby, R. A.　1987　Adolescent pubertal status and affective family relationships: A multivariate assessment. Journal of youth and adolescence, 16, 1.

Pipp, S., Shaber. P., Jennings, S., Lamborn, S., & Fischer, K. W.　1985　Adolescents' theories about the development of their relationships with parents. Journal of Personality and Socialpsychology, 48, 4, 991-1001.

佐藤有耕・山本誠一・加藤隆勝　1991　高校生の悩みと求める援助の特質. 筑波大学心理学研究, 13, 141-154.

Steinberg, L. D., & Hill, J. P.　1978　Patterns of family interaction as a function of age, the onset of puberty and formal tyinking. Developmental Psychology, 14, 6, 683-684.

SteinBerg, L. D.　1981　Transformations in family relations at puberty. Developmental Psychology, 17, 6, 833-840.

山本　誠一　1993　青年期おける分離-個体化と不安. 筑波大学心理学研究, 15, 195-200.